『踊るような　鏡みたいな』

＜登場人物＞

紗希　（高校一年生）
そよぐ　（高校一年生）
楓　（中学二年生）
瑠璃　（中学二年生）
菜々子　（中学二年生）
汐海　（中学二年生）

＜一　場＞

音楽。
明かりがつくと、一人で踊っている汐海。
紗希が来る。汐海を見ている。
紗希に気付く汐海。踊るのをやめる。
イヤホンを外す。音楽は消える。

紗希　ダンス、うまいね。

汐海、去る。

紗希　あ。・・・見ない子だな。

ここは山間部の空き店舗の駐車場。
紗希は正面を向く。軽くダンスの振りを始める。

紗希　この場所を見つけた時はラッキーって思った。「外が良く見えるように」と作った大きなガラス窓が、鏡の代わりになる。中学の時、そよぐと一緒に踊ったな。まだそのままだったんだ。・・・ってか、新しいテナント入んないのかよ？　不景気だな。

振りをやめて、ガラス窓に映る自分を見ている。
楓と瑠璃と菜々子が来る。

楓　先輩。

紗希　おぉ、楓。瑠璃と菜々子も？

瑠璃　楓に巻き込まれて。
菜々子　あ、はい。
楓　変な言い方やめて。二人ともやるって言ったじゃん。
瑠璃　冗談だって。
紗希　相変わらず仲いいな。
楓　で、教えてもらえますか？
紗希　夏休みだけど、忙しいんだよな。
菜々子　部活ですか？
紗希　補習。高校生は勉強しないとね。
楓　基本を教えてもらえれば、あとは自主練するんで。
紗希　簡単に言うな。
瑠璃　ですよね。そう簡単にできないって。
楓　瑠璃、諦めたらそこで試合終了だよ。
菜々子　試合じゃなくてイベントでしょ。
紗希　イベント？
楓　去年先輩たちやってたじゃないですか。
紗希　道の駅の「夏祭り」？
楓　はい。あれ、やりたいねって。
紗希　出られるの？
瑠璃　「去年みたいに誰かできないか」って中学校に話が来たんですけど。
楓　私たちがやりますって、手を上げたんです。
瑠璃　手上げる前に、相談しろ。
紗希　やっぱり巻き込まれてるぞ。
楓　やるって言ったでしょ。
菜々子　でも、先輩たちみたいにカッコ良くはできないからさ。
楓　だから教えてもらうんじゃん。
紗希　実は今、ダンス部休部しててさ。身体なまってるんだよね。
楓　大丈夫です。踊るのは私たちですから。
瑠璃　大丈夫じゃないから。
楓　大丈夫じゃないから教えてもらうんでしょ。
菜々子　また、それ。
紗希　わかった。じゃあ、私が基本的な事は教えて、振りも付けてやるよ。
楓・瑠璃・菜々子　ありがとうございます。
紗希　場所はここでいいかな・
瑠璃　ここ、前、蕎麦屋だったとこですよね？

紗希　道の駅に移転してからは、空き店舗。
菜々子　何でここの駐車場なんですか？
紗希　ほら。（正面を指す。）
楓　あ、鏡になってる。
紗希　こんな大きな鏡、町のダンススタジオでもなかなかないよ。
瑠璃　なるほど。
紗希　そよぐとよく練習してた、秘密基地みたいなとこなんだ。
楓　テンション上がる。
紗希　で、やるのは三人？
瑠璃　はい。
菜々子　他に付き合ってくれる子いないんですよ。
紗希　まぁ、去年も二人でやったから、大丈夫か。
瑠璃　先輩たちと比べちゃダメです。今年は三人でも大幅戦力ダウンですから。
楓　自虐がすぎるぞ。
菜々子　いや、事実だから。
紗希　さっき、ここで踊ってる子いたけど。
楓　誰？
紗希　見たことない子だった。
菜々子　座敷童子？
楓　それ、お前。
菜々子　ひどい。
瑠璃　あぁ、何か井原商店のばあちゃんとこに孫が来てるって。その子じゃないかな。
紗希　夏休みだからか。
瑠璃　みたいですよ。
紗希　結構踊れそうだったからな。
菜々子　呼ぶ？
楓　えー、知らない子だよ。
瑠璃　いつまでいるかわかんないし。
紗希　そうだね。ま、その子のことは置いといて、早速練習するか。
楓・瑠璃・菜々子　はい！

音楽。
紗希の指示で動き、踊る三人。

<二場>

踊っている楓・瑠璃・菜々子。
紗希が音楽を止めて、三人に今のダンスのダメ出しなどをする。

そよぐが来る。

そよぐ　よ！　若者たち、頑張ってるね。
紗希　どこのおっさんだよ。
そよぐ　楽しそうだね。
楓　辛いです。吐きそう。
そよぐ　え？
瑠璃　楓？

楓、去る。
追っていく瑠璃・菜々子。

そよぐ　教官、厳しいな。
紗希　そんなに厳しくないって。楓は体力ないんだよ。
そよぐ　特訓で体力つくかな。
紗希　・バイト帰り？
そよぐ　そう。
紗希　余裕だな。
そよぐ　そうでもないよ。
紗希　課題とかないの？
そよぐ　夏休みはね、やりたいことやるんだよ。私はやりたい事のためにバイトしてる。紗希はやりたいことのために補習に行く。
紗希　補習、な。
そよぐ　がんばれぇ。
紗希　わたしのやりたいことって何だろ。
そよぐ　私に聞く？
紗希　高校入ったのはいいけどさ、何か想像してたのと違ってさ。
そよぐ　何を想像してたの？
紗希　もっとキラキラっていうか
そよぐ　「青春してる！」みたいな。
紗希　そう。
そよぐ　ところが、勉強から解放されるわけでもないし。

紗希　そう。
そよぐ　キラキラするにも田舎者じゃ気後れするし。
紗希　そう。
そよぐ　当然、彼氏もできないし。
紗希　ほっとけ。
そよぐ　まぁ、人ぞれぞれだからいいんじゃない？
紗希　お気楽だな。
そよぐ　そうでもないぞ。
紗希　そよぐのやりたい事って、何？
そよぐ　ん？　聞きたい？
紗希　あ。

紗希が走り去る。

そよぐ　おい。・・・誰？　ナンパしてるのか？　お、なんか強引だぞ。「へい、彼女。今時間ある？」「いえ、今はちょっと忙しくて」「そんなこと言わずに」「あ、ダメです」「ちょっとだけだから」「でも」「よいではないか、よいではないか」「あ～れ～」

紗希は汐海を連れて戻ってくる。

紗希　何やってるの？
そよぐ　・誰？
紗希　井原のばあちゃんとこの孫。で、いいんだよね。
汐海　・・はい。
そよぐ　夏休みだから？
汐海　・・・まぁ。
そよぐ　で？
紗希　この子、踊れるからさ。一緒にやらないかなって。
そよぐ　おぉ。
汐海　一緒に、ですか？
紗希　うん。
汐海　いや、私そういうのは・・・
そよぐ　振られてるぞ。
紗希　今日も、ここに来たんでしょ。
汐海　使ってるんなら、別にいいです。
紗希　そんな。ここも私たちの場所ってわけでもないし。

そよぐ　ここで踊ってたの？
汐海　・はい。
紗希　いいよね、ここ。
そよぐ　人もあんまり来ないし。
紗希　鏡もあるし。
そよぐ　あと、下がダンスマットだと言う事ないよね。後、屋根も。
紗希　贅沢過ぎるぞ。ねぇ。
汐海　あ、はい。
紗希　どうせ踊るんだったら、大勢の方が楽しいと思うんだ。
汐海　でも・・

楓たちが戻ってくる。

そよぐ　大丈夫？
楓　大丈夫です。
菜々子　誰？
紗希　あぁ、井原のばあちゃんとこの、名前は？
そよぐ　知らないのかよ。
汐海　汐海です。
紗希　しおみちゃん。
瑠璃　瑠璃です。
菜々子　菜々子です。
楓　楓です。三人揃って・・・
そよぐ　・・・無いのかよ。
楓　いや、ノリで。
紗希　あ、でもグループ名とか作った方がいいよね。
楓　ですよね。
菜々子　で、あの・・
紗希　あぁ。夏休み中、こっちにいるって言うからさ、一緒にどうかなって。
楓　イベントにですか？
紗希　うん。
そよぐ　踊れる子が一人いると違うぞ。
瑠璃　戦力補強？
紗希　汐海だったらすぐに覚えられるからさ。
楓　ほんと？
菜々子　すごい。

汐海　そんなのはやってみないとわからないですよ。
紗希　じゃあ、やってみる？
汐海　え？
そよぐ　レッツ、ダンス！

音楽。

<三場>

踊っている楓・瑠璃・菜々子・汐海。
ダンス、終わり。

楓　休憩しよ。
菜々子　うん。
瑠璃　汐海が入ってよかったね。
汐海　え？
瑠璃　自主練する時、お手本になるじゃん。
楓　それな。
菜々子　三人だけでやってると、誰が正しいのかわかんなくなるんだよね。
楓　みんな違ってたり。
菜々子　そうそう。
瑠璃　ダンス習ってたの？
汐海　ちゃんと習ってはいないです。好きでやっていただけで。
菜々子　自己流？
汐海　はい。
楓　先輩たちみたいだ。
汐海　紗希さんもそうなんですか？
瑠璃　そう。
楓　あぁ、先輩や汐海みたいに踊れたらな。
汐海　でも、皆さんも初めてなのに、覚えるの速いですよ。
瑠璃　汐海さ、敬語使わなくていいよ。
菜々子　そうだよ、同じ歳だし。
汐海　そうですよね。
瑠璃　ほら。
汐海　あ。・・そう、だよ。だね？
楓　ぎこちないな。

汐海　すいません。
瑠璃　いいよ、慣れてけばいいから。
汐海　はい。
楓　そうずら。
汐海　え？
瑠璃　あ、おばあちゃん使ったりしない？
菜々子　「ずら」。
汐海　あぁ、使います。
楓　そうずら？
汐海　はい。
楓　使うずら？
汐海　・・使うずら。

四人は笑う。

そよぐが変な所から出てくる。
ツタが絡まっててもよい。

そよぐ　やってるね。
瑠璃　先輩、どこから？
そよぐ　いや、こっち近道だから。自主練？
楓　はい。
そよぐ　新人さんも？
汐海　はい。
菜々子　新人じゃなくて、ベテランですよ。
瑠璃　ほんと、一番うまいから。
汐海　いえ、みなさんも
楓　ほら。
汐海　あ。・みんなも、うまいずらよ。

四人は笑う。

そよぐ　最近の若い子は、何が面白いんだかわからんね、おじさんには。って、誰がおっさんだよ。
瑠璃　先輩？
そよぐ　おぉ、そうだ。この間言ってた、去年のイベントのＤＶＤと、参考になるかなと思って他にも。

楓・瑠璃・菜々子・汐海　ありがとうございます。

そよぐは、DVDをいくつか、みんなに渡す。

そよぐ　汐海には、これ。興味あるって言ってたでしょ。
汐海　ありがとうございます。
菜々子　え？　私も観たい。
そよぐ　順番に回していいよ。
汐海　じゃあ見たら、貸すよ。
菜々子　ありがとう。
そよぐ　じゃあ、私はバイトに行くから。
瑠璃　忙しいとこすいません。
そよぐ　いいって。

そよぐ、去る。

菜々子　ダンスって思ってたより楽しいね。
楓　だろ？
瑠璃　まだ下手だけど。
菜々子　でも、楽しい。
楓　それはね、「みんなはこれ以上下手にはならないから。やっただけうまくなるからだよ。」
菜々子　偉そうに、紗希先輩の真似して。
瑠璃　でも汐海は？
汐海　え？
瑠璃　私たちみたいなのと踊ってたら下手にならない？
汐海　そんなことないよ。
菜々子　もし下手になっててても面と向かって言えないよね。
汐海　そうじゃないって。
楓　いや、下手になっててても私たちにはわかんないから。
瑠璃　そうだね。
汐海　自虐がすぎるぞ。
楓　そうだ。
汐海　そうずら。
瑠璃　そうずら。
菜々子　そうずら。

四人笑う。

菜々子　ねぇ、汐海はダンスのどこがよかったの？
瑠璃　漠然とした質問だな。
汐海　うーん。・・・踊ってると、嫌な事忘れられるとこ、かな。
楓　そうだよね。宿題の事とか忘れられるし。
菜々子　私も。
瑠璃　忘れるなよ。
菜々子　でも家に帰ると思い出すんだよね。
楓　だから家でも踊ってる。
瑠璃　少しずつでも宿題やっときなよ。
楓　イベント終わったらやる。
菜々子　汐海のとこは？
汐海　え？
菜々子　夏休みの宿題。
汐海　・うん。あるよ。
瑠璃　汐海、勉強も出来そう。
汐海　そんなことないって。
菜々子　今度、勉強も教えてもらおっかな。
汐海　だから、そんなにできないって。
楓　Can you speak English？
汐海　・・A little.
楓・瑠璃・菜々子　おぉ。
汐海　何？　これ。
楓　やっぱおまちの子は違うわ。
汐海　おまち関係ないから。
菜々子　一学年で何クラスあるの？
汐海　八クラス。
楓　すげぇ。
瑠璃　田舎は一学年一クラスだから。
菜々子　クラス替えないんだよ。
楓　ずーっと同じメンバー。
瑠璃　嫌なの？
楓　このメンバーはいいよ。汐海も。
汐海　私も？
菜々子　でも、夏休み終わると帰っちゃうんだよね。
汐海　たぶん。

瑠璃　たぶん？
汐海　いや、帰るけど、おばあちゃんいるし。こっちには来るからさ。
楓　そうだよね。
菜々子　そうしたら、また一緒に踊れるじゃん。
楓　ってか、先輩忙しそうだからさ、いっそ汐海に振付してもらってさ。
汐海　え？　振付なんてできないよ。
楓　大丈夫。私たちよりできるから。
瑠璃　私たちと比べちゃダメだよ。
菜々子　イベント終わっても、一緒に踊ろ。
汐海　うん。
瑠璃　夏休み終わっても。
汐海　うん。
菜々子　約束だよ。
汐海　約束。
楓　あー、夏休み終わっちゃうのか。
菜々子　いつかは終わるよ。
楓　「学校なんか行きたくない」。ずっと夏休みでいい。
瑠璃　汐海、楓のいう事は、聞き流せばいいからね。
汐海　うん。
楓　ひどい。よし。嫌なこと忘れて踊るぞ。

音楽。
踊る四人。
途中で汐海が抜けて、三人で踊る。

〈四場〉

音楽、カットアウト。
楓・瑠璃・菜々子。

瑠璃　え？　不登校？
菜々子　うん。
楓　夏休み中はみんな不登校だよ。
菜々子　夏休み前から。
瑠璃　それ、学校でいじめとか、あったのかな。

菜々子　わかんないけど、そうかも。
瑠璃　でも、全然そんな風に見えなかったよね。
楓　ちょっと控えめなとことか。
瑠璃　それはまだ知り合ったばっかりだから。
楓　慣れたら、変な事言ってきたりするのかな。
菜々子　向こうの学校が嫌になってるんだったらさ、このままこっちの学校に転校しちゃえばいいのに。
楓　そうだよね。
瑠璃　それもあって、こっちに来てるのかな。
楓　そうかもね。
瑠璃　でも、原因わかんなきゃ、こっちでも同じことになっちゃわない？
楓　原因、かぁ。
菜々子　・私もさ、小学校の時、仲間外れにされてた時期あったんだよね。
瑠璃　あ、うん。
楓　あれは、ごめん。
菜々子　あれ、何がキッカケだったか、覚えてる？
瑠璃　何だったっけ？
楓　・・体育の時間の？
菜々子　給食の時、私が牛乳こぼして。
瑠璃　あぁ、楓にかかって、すごい怒った。
楓　そんなに怒った？
瑠璃　覚えてない？
楓　何となくは覚えてる。
菜々子　あれから、なんか避けられちゃって。
楓　ごめん。いや、なんか話しづらくってさ。
菜々子　何がキッカケでそうなっちゃうのか、わかんないし、そのキッカケも忘れちゃうようなものだったりするんだよね。
瑠璃　でも、仲間外れにされた方は覚えてるんだね。
菜々子　うん。
楓　ごめん。
瑠璃　汐海には何があったんだろ。
楓　聞いてみる？
瑠璃　えー。
菜々子　言いたくない事、無理に掘り返さないほうが。
楓　そうだけどさ。じゃあ私たちが知ってるってことは、汐海に言

う？
瑠璃　どうなんだろう。知られたくないんじゃないかな。
菜々子　知ってるのに知らない振りするっていうのも良くないんじゃ。
瑠璃　あえて話題にしなきゃいいんじゃない？
菜々子　話題にしないって、NGワード作るの？
楓　あ！　私、この間思いっきり「学校なんか行きたくない」って言っちゃってたよね。
菜々子　言った。
楓　あれって汐海の地雷だった？
瑠璃　かな。
菜々子　あ。

菜々子が正面（鏡）を見た後、袖方向を見る。
楓、瑠璃もそれに続く。そちらに汐海がいるらしい。

瑠璃　汐海・・

汐海は去っていったらしい。
三人は顔を見合わせたあと、汐海を追いかけていく。

小さい明りの中、汐海が一人でいる。

汐海　別に、いじめられてた、わけじゃない。勉強が嫌・・だったかもしれない。身体が・・何故か、動かなかった。そういうのは言い訳だってわかってる。だけど、なんでなのかは正直自分でもわかんなかった。
「環境を変えたら？」って言い出したのはお母さんだ。おばあちゃんのところ。知ってる人もいないからって。ちょうど夏休みだから、そういうのも理由で。
こっちに来たら、確かに気持ちは楽になって、家の外にも出られるようになった。そうしてる間に、あの鏡を見つけたら、無性に踊りたくなった。
紗希さんに誘われて、なんか新しくいろんなことがやり直せる気がした。みんなで踊るのも楽しかった。
でも、やっぱり素直に自分のことは話せなかった。話せなかった

ことが、結果的に嘘をついたような気になった。友達が出来る気がしたけど、やっぱり駄目だった。
何にも変わってなかった。私はやっぱり、ダメな人間なんだ。

暗転。

<五場>

明りがつく。
紗希とそよぐ。

紗希　汐海のとこにも行ったんだ。
そよぐ　会えた？
紗希　ううん。井原のばあちゃんの話だと、部屋にこもっちゃって、ばあちゃんにも顔見せないって。
そよぐ　学校行かなくなった原因は聞いた？
紗希　あからさまないじめがあったわけではないらしくって。ばあちゃんもよくわかんないみたい。
そよぐ　そうか。
紗希　どうしよう。
そよぐ　・・そもそも学校ってなんで行くんだろう。
紗希　は？
そよぐ　何でだと思う？
紗希　え？　勉強するため。
そよぐ　優等生ぶんなよ。
紗希　友達に会うため。
そよぐ　ま、それが一番かな。だとしたら友達いなかったら行かなくない？
紗希　汐海に友達いなかったってこと？
そよぐ　いたけど、いなくなったとか。知り合いは居たけど、親友はいなかったとか。
紗希　そう簡単に親友なんてできないよ。
そよぐ　紗希には？　親友は？
紗希　え？　そよぐが親友のつもりだけど。
そよぐ　ありがとう。
紗希　そよぐは？
そよぐ　私もそのつもり。・・でさ、友達いないのに学校行く？

紗希　行くでしょ。中学までは義務教育だから。
そよぐ　最近知ったんだけどさ。私たちが学校に行く義務なんてないんだよ。
紗希　高校生だから？
そよぐ　中学生も。
紗希　義務教育なのに？
そよぐ　そう思うよね。でも義務教育の「義務」って、「子供に教育を受けさせる義務」なんだよ。
紗希　え？　あ、そうなの？
そよぐ　だから義務感で学校行くのは間違い。
紗希　そうすると、親は義務があるから子供を学校に行かせなきゃだ。
そよぐ　行きたくないのに、無理やり行かせると今度は虐待って言われる。
紗希　親、大変だ。
そよぐ　それに「学校に行かせる義務」じゃなくて「教育を受けさせる義務」だからね。
紗希　必ずしも学校に行かなくてもいい。
そよぐ　そうなるね。
紗希　今日はそよぐが賢く見える。
そよぐ　実は賢いのだ。
紗希　なんで？
そよぐ　なぜそこに疑問を挟む？　まぁ最近、本たくさん読んでるからかな。
紗希　学校行かなくてもいいって思ったら、汐海も気が楽になるかな。
そよぐ　いや。実際はほとんどの人が学校行ってるんじゃあ、自分は落ちこぼれだっていう気持ちは変わらんでしょうね。
紗希　難しいな。
そよぐ　ずっと夏休みだったらいいのにね。
紗希　え？
そよぐ　学校行きたい人は補習や部活に行けばいいし、行きたくない人はよそで友達作ったりバイトしたり、ダンスしたりすればいい。
紗希　私も学校行きたいわけじゃないんだよ。
そよぐ　・じゃあ、やめる？
紗希　それは、無いけど。

そよぐ　だよね。やりたいことのために勉強するのだ。
紗希　そのやりたいこともわかんないんだよね。
そよぐ　やりたいことが出来た時、選択肢が多くなるように勉強しとくってのもアリだよ。って私が偉そうに言っても説得力ないか。
紗希　今日のそよぐは説得力ある。
そよぐ　やった。
紗希　自分のこともぼんやりなのに、汐海に何かしてあげられるわけないのかもね。
そよぐ　現実問題、イベントはどうする？
紗希　三人に編成し直すか、四人のままにして待つか。
そよぐ　ギリギリまで待ってダメだったら？
紗希　でも、三人にしたら、もし汐海が戻ってこれた時に・・・
そよぐ　じゃあ四人のままで行くってことでしょ。
紗希　そうだけど、もし来なかったら
そよぐ　来なかったら、汐海のパートは紗希が踊ればいい。
紗希　私が？
そよぐ　他に誰が？
紗希　・・・わかった。

暗転。暗い中、MCの声。

MCの声　「盛り上がってますか？　『道の駅・夏祭り2019』次に登場してくれるのは、地元の中学校の生徒さんたちで結成したダンスグループ「ワラシーズ」です。どうぞ！」

音楽。
明りがつくと、楓、瑠璃、菜々子が踊っている。
遅れて紗希もダンスに合流する。

<六場>

踊り終わる。
楓、瑠璃、菜々子。

菜々子　やっぱり四人で踊りたかったよね。
楓　踊ったじゃん。

菜々子　紗希先輩とじゃなくて。
瑠璃　でも、先輩が踊ってくれて良かったよね。
菜々子　そうだけど。
瑠璃　そりゃあ、汐海が来れたらって思ったけど。
楓　だから、無理だったんだよ。
瑠璃　無理じゃなかったよ。
楓　だって、学校行けてないってことは、集団行動ができないってことでしょ。
菜々子　一緒に踊ってたじゃん。
楓　最後までやれないんじゃ、同じだよ。
瑠璃　そんな言い方しなくても。
楓　あーぁ、こんな気持ちになるんなら、初めっから三人でやってればよかった。
菜々子　そんなこと言うなら、私は初めっからやらなきゃよかったって思うよ。正直、踊ったことない私たちがやるってこと自体が無茶だったんだよ。
瑠璃　でも、やれたでしょ。
菜々子　汐海がいたからできたんだよ。三人じゃ振りもちゃんと覚えきれなかったよ。
楓　覚えられたよ。
菜々子　無理だよ。
楓　無理じゃないよ。
菜々子　無理だったよ。
瑠璃　やめようよ。
楓　・・瑠璃はどう思ってるの？
瑠璃　私？
楓　三人と四人と、どっちがよかった？
瑠璃　そんなのわかんないよ。結果的には四人で踊ったんだけどさ。
楓　結果的に、最初から先輩入れて四人で踊ればよかったって事ね。
瑠璃　そんなこと言ってないよ。
楓　言ってるよ。
菜々子　じゃあ、汐海は？
瑠璃　汐海も踊れたらよかったよ。
菜々子　でも、先輩と踊れてよかったんでしょ。
瑠璃　そんなこと言ってないよ。
菜々子　さっきそういう風に聞こえた。
楓　どっちでもよかったんでしょ。

瑠璃　どっちでもって・・・
楓　瑠璃はさ、自分の考え言わないよね。
瑠璃　自分の考え？
楓　いつもいい子ぶってさ。
菜々子　楓。
楓　どうせ私は悪い子ですよ。でも、自分に嘘はつきたくないからさ。

楓は去る。

菜々子　楓は、困る。
瑠璃　ごめん。
菜々子　え？
瑠璃　私、変な事言っちゃって。
菜々子　私も、先輩が踊ってくれてよかったって思うよ。でもそれって、先輩が最後まで汐海の居場所を作ってくれてたからで。
瑠璃　ごめん。
菜々子　謝ることじゃないよ。初めは三人でやるっていってたしさ。でも四人の方が楽しくって。汐海すごいなって思って。本当はお節介なのかもしれないけど、勝手に汐海のこと考えちゃってて。
瑠璃　私も汐海のこと考えてなかったわけじゃないよ。
菜々子　わかってる。瑠璃、いつも気を遣ってくれてるもんね。私の方こそ、さっきは強く言い過ぎた。ごめん。

菜々子も去る。
一人残る、瑠璃。

〈七場〉

時間経過。
瑠璃がいるところに、そよぐが来ている。

そよぐ　なるほどね。
瑠璃　でも私、本当に「汐海と踊りたかった」のかなって？
そよぐ　踊りたかったんじゃないの？
瑠璃　汐海が来なくなって、正直「困ったな」って思ったんです。でももっと正直言うと「困った子だな」って。

そよぐ　汐海のこと心配してるんじゃなくて、迷惑だって思っちゃったんだ。
瑠璃　はい。イベント終わって三人で話してた時も、ただ争いごとがしたくないだけなんじゃないかって。楓の言うように、私はいい子ぶってる嫌な子かもしれない。
そよぐ　・・自分の事がわかんなくて、一生懸命考えてるとさ、自分の目が内側に内側に向かって行くんだよね。
瑠璃　私ですか？
そよぐ　みんな。そうすると、余計に自分が見えなくなっちゃう。そういう時こそ自分を外から見なくちゃいけない。
瑠璃　そんな余裕ないですよ。悩んでたら、尚更。
そよぐ　うん。だから、ほら。

そよぐは鏡を指す。瑠璃も見る。

そよぐ　見たくない自分がいるけど、見といた方がいい。
瑠璃　・・・・私、暗い顔してる。
そよぐ　きっと瑠璃は汐海も入れて四人で踊りたかったんだよ。でも「四人で踊りたかった」って口にすると、それを邪魔した汐海を責めることになる。だから自分に蓋をしちゃう。
瑠璃　じゃあ、私はどうすれば？
そよぐ　過ぎちゃったことは仕方ないよ。でも「四人で踊る」事は出来るんじゃないの？　今からでも。
瑠璃　・みんなはわかってくれるかな。
そよぐ　「四人で」って思うんだったら、わかってもらうしかないんじゃない？
瑠璃　・・・はい。

瑠璃は去る。

そよぐ　頑張れ、若者よ。・・・って二歳しか違わないか。

そよぐも去る。

暗転。

<八場>

紗希　すいません。

紗希はおばあさんにあいさつをして、小さい明りの中にやってくる。

ここは、汐海の部屋の前らしい。

扉の向こうにいる汐海に話しかける。

紗希　汐海、いる？　いるよね。

心配しなくても、イベントはちゃんとやれたから。いや、汐海がいなくても大丈夫だったって意味じゃないんだ。汐海のパートは私がやった。

なんか、汐海の事情も知らずに無理矢理巻き込んじゃってごめんね。

汐海が扉の向こうに現れる。

紗希　でも、初めて汐海のダンスを見た時、実は、ちょっと悩み事があったんだ。だけど、それが晴れていく気がしたんだ。そうしたら、この子と一緒に踊りたいって・・・・

学校に行ってないことは、そんなに気にしなくてもいいんじゃないかな。今はちょうど夏休みだし。夏休み終わって、また行くキッカケができたら・・・それが出来たら苦労は無いよね。

汐海は何も言わずに、奥へ去る。

紗希　もしよかったら、また一緒にダンスやらない？

奥で「ドン！」という音。

紗希　汐海？

紗希は扉を見ている。やがておばあさんにあいさつをして去る。

汐海が別の小さな明りの中にやってくる。

汐海　何やってるんだ、私。紗希さんにも迷惑かけちゃってる。・・・みんなと踊るのは楽しかった。新しく友達が出来るかもって。でも、嘘ついてるって思ったら行きづらくなって、そのまま・・・ダンスでだけは嘘つきたくなかったのに。会いに行きたいのに・・・勇気が出ない。

暗転。

〈九場〉

明りがつく。
紗希は一人でいる。
そよぐが来る。

紗希　・・・
そよぐ　よぉ。・・・行った？
紗希　行った。
そよぐ　で？
紗希　当たり障りのない話をして帰ってきた。
そよぐ　何だよ、それ。
紗希　そうだよ。何しに行ったんだよ。何かしなきゃって思って行ったのに、言い訳だか慰めだかしゃべって。・・・自分が安心したかっただけじゃん。
そよぐ　「あぁ、私は汐海のこと心配してるな」って？
紗希　そう。心配してる優しい先輩。偽善者。
そよぐ　偽善者じゃダメ？
紗希　ダメでしょ。
そよぐ　なんで？
紗希　嘘つきなわけだからさ。
そよぐ　心配してたのは本当でしょ。
紗希　それは、本当だよ。
そよぐ　じゃあ嘘じゃないじゃん。
紗希　必要以上に心配してるのは、やっぱり偽善だよ。
そよぐ　言い訳する奴はダメ、嘘つく奴はダメ、偽善者はダメ。
紗希　・・・
そよぐ　学校行かない奴もダメ、部活やめちゃう奴もダメ。・・・自分で自分の首絞めて、息苦しくない？

紗希　・・・
そよぐ　・・・踊るか。
紗希　え？
　そよぐは音楽をかける。
そよぐ　踊ろうぜ。
　音楽。
　踊るそよぐ。やがて紗希も踊る。
　踊り終わる。
紗希　懐かしいな。
そよぐ　踊ると少しは気が晴れるでしょ。
紗希　うん。少しはね。でも、それって誤魔化しだよね。
そよぐ　いいじゃん。誤魔化しで。
紗希　よくないよ。今、汐海は苦しんでるんだよ。
そよぐ　だから自分も苦しむべき？
紗希　そうは言わないけど。
そよぐ　そして汐海は、「私のせいで紗希先輩が苦しんでいるんだ」
　ってさらに苦しむ。
紗希　そんなつもりは・・・そよぐは悩みが無いからそんな言い方
　出来るんだよ。
そよぐ　私だって悩むこともあるよ。
紗希　どんな？
そよぐ　例えば・・「高校どうしようかな」とか。
紗希　それ、去年の悩みでしょ。
そよぐ　二か月前の悩み。
紗希　・・どういうこと？
そよぐ　私さ、九月から学校変わるんだ。
紗希　え？　聞いてないよ。
そよぐ　言ってないもん。
紗希　どこに？
そよぐ　単位制の高校に編入できることになった。
紗希　ちょっと待って、いきなりそんな。・・あんなに受験勉強して
　入ったのに？
そよぐ　ね。

紗希　何で？
そよぐ　ダンスやろうと思ってさ。
紗希　別に学校変わんなくても。
そよぐ　スタジオにも通おうと思って。
紗希　それでバイト？
そよぐ　そう。
紗希　プロになるの？
そよぐ　わかんない。
紗希　え？　「わかんない」って意味わかんないよ。
そよぐ　だよね。今の学校に入ったけど、やりたいことがわかんなくなっちゃって。
紗希　入ってから、そんな。
そよぐ　本当は入る前に考えるべきだったんだけど、私、頭鈍いから気付かなくって。
紗希　将来のことは？
そよぐ　将来？
紗希　進学とか、就職とか。
そよぐ　おばあちゃんになるとか。
紗希　ちゃんと考えろよ。
そよぐ　考えたよ。いろいろ。でも先のことなんかわかんないでしょ。
紗希　わかんないから、いろいろ考えるんじゃん。
そよぐ　うん。だから考えて、考えて、考えて。考えたら、最後はおばあちゃんになるんだな、って。
紗希　ふざけないでよ。
そよぐ　ふざけてなんかないよ。将来おばあちゃんになって「あー、いろいろ大変なこともあったけど、いい人生だったな」って言って死にたいの。「やりたい事やったから、誰にも文句言えないな」なんて言ってね。
紗希　・・・
そよぐ　そう思ったら、今はダンスやろうって。
紗希　・・・
そよぐ　別に、紗希にもそうしろって言ってるんじゃない。私は私で考えて、そうすることにした。
紗希　ずるいよ。
そよぐ　え？
紗希　自分だけ、さっさと決めちゃって。

そよぐ　・・・ごめん。

紗希は去る。

残ったそよぐ。

そよぐ　本当は紗希と一緒に悩んであげたいとも思う。けど、うまくできないんだよね。親友のはずなのに。お気楽すぎるんだよな、私は。でも、こういう奴が必要な時もあるだろうって思う。

携帯電話を出してメールを打つようなしぐさ。

そよぐ　「あ、そういえばさ」って、急に今思い出したように。「いつでもいいからさ」って、気軽に言えるような。そんな奴が汐海にも必要かなって。・・・日が落ちて、人通りが少なくなったら、他人に会いたくない奴も外に出られるんじゃないかって。

<十場>

夜になる。

一人でいるそよぐ。

恐る恐る汐海がやって来る。

そよぐ　久しぶり。

汐海　すいません。借りっぱなしで。

そよぐ　ごめんね、呼び出したりして。

汐海　いえ。

汐海はそよぐにDVDを渡す。

汐海　じゃあ、失礼します。

そよぐ　待ちなよ。せっかくだから、少し話でもしよ。

汐海　いえ、迷惑かけてしまうんで。

そよぐ　迷惑なんて思わなくていいからさ。

汐海　でも・・・失礼します。

そよぐ　私、学校辞めるんだ。

汐海　え？

そよぐ　うん。
汐海　辞めるんですか？
そよぐ　そう。
汐海　それは・・・
そよぐ　高校に入ることが目的になってたんだね。だから入ったら目的が無くなっちゃった。そうしたら「何のために学校行ってるんだろ？」って疑問ばっかり。
汐海　・・そうですね。
そよぐ　それで、学校行くのが嫌になって、学校行く振りして図書館行ってた。
汐海　本、好きなんですか？
そよぐ　いや。エアコンきいてるし、本読んでるふりさえしてれば、図書館の人は職務質問してこないから。
汐海　職務質問って。
そよぐ　昼間に町うろついてると、声かけられない？
汐海　うろつかないんで。
そよぐ　だよね。・・・でも元々、本好きなわけじゃないから、すぐ飽きちゃうんだ。だから読んでるふり。面白そうなタイトル見つけて手に取って、椅子に座って読むんだけど。飛ばし読みしたり、ちょっと目を通して棚に戻したり。本は開いてるんだけど、頭の中は「あー、高校どうしようかな」とか、「将来どうなるんだろ」とか、ずーっと考えてた。ずーっと。で、わかったことがある。
汐海　何ですか？
そよぐ　世の中には、私が一生かかっても読み切れないほどたくさんの本があるな、ってこと。
汐海　は？　それ
そよぐ　当たり前の事。
汐海　はい。
そよぐ　その通り。でも、世の中には自分が知らない世界がいっぱいで、とてもじゃないけど全部受け止めるなんて無理って思ったら、体が軽くなった。そして思った。「よし！　全部は無理だから、逃げよう！」
汐海　逃げても何の解決にもならないです。
そよぐ　汐海も逃げたの？
汐海　私は学校から逃げました。でも、何の解決にもなってない、ダメな人間なんです。
そよぐ　違うよ。逃げないであれもこれも受け止めようとするから

身動き取れなくなっちゃうんでしょ。
汐海　え？
そよぐ　せっかく学校から逃げたんなら、「学校に行けないダメな自分」からも逃げちゃえばいいんだよ。
汐海　・・・・
そよぐ　って偉そうに言ってる私がどうしたかって言うと。無理なものは無理だから、自分のできる事なんて限られてるから、だからまず自分の好きなことからやろう。で、ダンスをやることにした。
汐海　・・・・
そよぐ　一歩踏み出したら、それまで動かそうと思っても動かなかった身体が、音楽聞いたら勝手に動きだした。不思議だよね。
汐海　・・・私は、最初の一歩を踏み出す勇気が無いんです。
そよぐ　最初の一歩は自分の好きな事でいいんだよ。
汐海　でも、ダンスももうダメで。
そよぐ　他に何かある？
汐海　他には・・無いです。
そよぐ　だったら、またダンスから始めればいいんじゃない？
汐海　でも、もうみんなには
そよぐ　じゃあ、一人で踊るとこから。
汐海　・・・・
そよぐ　だって、そこ以外にどこから勇気もらうつもり？
汐海　・・・・
そよぐ　・・・・紗希に会わない？
汐海　え？
そよぐ　そろそろ、ここに来ると思うよ。
汐海　呼んだんですか？
そよぐ　いや。悩んだりすると、一人でよくここで踊ってるからさ。
汐海　でも・・・・
そよぐ　・・こっち。

そよぐは汐海を連れて隠れる。

紗希が来る。
音楽をかけ、一人で踊る。一場で汐海が踊っていたのと同じ曲。

汐海が出てきて、紗希を見ている。
汐海に気付く紗希は、音楽を止める。

紗希　汐海・・
汐海　紗希さん。
紗希　外には出られるようになった？
汐海　ちょっとだけ。
紗希　そうか。よかった。
汐海　心配かけてすいません。
紗希　こっちこそ、無理やり巻き込んじゃってゴメン。
汐海　いえ。・・・巻き込んでくれたのは、うれしかったんで。
紗希　よかった。
汐海　・・・みんなは？
紗希　うん。何かギクシャクしてるかも。
汐海　そうですか・・
紗希　汐海のせいってわけじゃないよ。よくケンカはしてるから、
　あの三人。
汐海　でも仲いいですよね。
紗希　うん。・・・何しにここへ？
汐海　・・紗希さんがここに来るって。そよぐさんから。
紗希　あいつ、知ってたんだ。
汐海　私も同じ曲で踊ってました。
紗希　え？
汐海　あの時。
紗希　初めてここで会った時？
汐海　はい。
紗希　そっか。
汐海　・あの時、悩み事がって、紗希さん。
紗希　うん。・・・高校行って、ダンス部に入ったんだけど、何かみんなのノリに付いて行けなくて。みんなとうまくやろうとはしてたんだけど、何のためにダンスやってるんだろうって考え始めたら、やめちゃってた。そんな時に楓から頼まれて。本当は気が進まなかったんだよね。
　でもあの時、汐海のダンス見てたら、また自分も踊りたくなった。もうね、理由なんかいいやって。だから、ありがとう。
汐海　私にお礼なんか。
紗希　今日もいろいろ悩み事あって。どうにも自分がダメな奴に思

えてきたから、ここに来て踊ろうと思ったんだ。

紗希は鏡を見る。

紗希　鏡を見るのは「うまく踊れてるか」確認するためだと思ってた。だけど今、こうやって鏡に映ってる自分を見てると、「とにかくここで踊っていられることが嬉しくて仕方なかった頃」を思い出すんだ。ほんの一年前までの話。「踊りたい」って素直に思えることが貴重なんだなって。

汐海も鏡を見ている。

汐海　私は・・・嫌なことがあっても我慢しなきゃいけない。みんなに合わせなきゃいけない。そう思ってました。でもそのうちそれが、自分に嘘ついてる気がして苦しくなってきて。学校へ行くのも苦しくなりました。
ここで踊ってたのも、嫌なこと忘れられるからで。それが紗希さんに声かけてもらった時、「自分の好きな事やってていいんだ」って思えた。うれしかった。嘘つかなくていいんだって思えた。
お礼を言うのは私の方です。ありがとうございました。

紗希　そうか。

汐海　でも、楓たちとも友達になれるって思ったのに、自分の事情も話せなくって。嘘ついて一緒に踊ってるなって思ったら、また苦しくなって。結局みんなに迷惑かけちゃいました。

紗希　・私も、何でも話し合える友達って理想だなって思ってた。でもそよぐは私に内緒で学校辞めるって決めてた。ひどいって思うよね。親友だって思ってたのに。

汐海　・・えぇ、まぁ・・

紗希　でも、秘密くらいあるよ、人間だもの。それに、悩みや決断を全部報告しなきゃいけない関係なんて、お互いに息苦しいのかもしれない。で、いろいろ考えたけど、それでもやっぱり、そよぐは私にとって一番の友達なんだ。私が私でいることを許してくれるから。一緒にいると気持ちが楽になるから。だから、親友。

そよぐが現れる。

紗希　そよぐ。
そよぐ　私も紗希の事、愛してるよ。
紗希　・・・「愛」は大袈裟だよ。
そよぐ　そう？
汐海　うらやましいです。
紗希・そよぐ　え？
汐海　そういう友達がいることが。
そよぐ　大事な事、相談しないよ。
紗希　事後報告だけでね。
そよぐ　ごめん。
汐海　でも、自分の決めたことを認めてくれる。
紗希　だって、自分で決めたんじゃあ、ねぇ。
そよぐ　私も紗希が決めたことなら認める。
紗希　なんだよ、いきなり。
そよぐ　汐海も。
汐海　私も？
そよぐ　自分で考えて決めたらいい。そうしたら私はそれを応援する。
汐海　決められるかは・・・
そよぐ　夏休みはまだあるし、夏休み終わっても考え続けたらいいよ。
汐海　・・そうですね。
そよぐ　で、困ったら踊る。

そよぐは曲をかける。

紗希　また。しかも踊ったことない曲で？
そよぐ　自分の好きに踊ればいいよ。私が許す。
紗希　「許す」って、何者だよ。
そよぐ　汐海も踊りたいよね。
汐海　・・はい。
そよぐ　ほら。
紗希　しょうがないな。

三人はお互いの動きを探りながら、お互いに自分の思いのままに踊る。
暗転。

〈十一場〉

楓、瑠璃、菜々子がいる。

楓　で、何なの？
瑠璃　ダンス、練習しようと思って。
楓　は？　もうイベント終わったんだよ。
瑠璃　イベントは終わったけど、ダンスはまだ完成してないから。
楓　何言ってんの。意味わかんないよ。
瑠璃　私も自分の考えを言おうと思って。
楓　自分の考え？
瑠璃　私は汐海を入れて四人で踊りたい。
楓　・・・もう無理だよ。
瑠璃　そんなことない。
菜々子　私は賛成。
楓　え？
菜々子　私も四人で踊りたい。
楓　「四人で」って、汐海は来ないよ。
瑠璃　だったら来るまで練習する。
楓　練習してたって、そのうち夏休みが終わったら、汐海も帰っちゃうよ。
菜々子　夏休み終わっても一緒に踊ろうって約束した。
楓　イベントに来なかった時点で、約束は破られてるんだよ。
瑠璃　ひょっとしたら、夏休み終わっても汐海は帰らないかもしれない。
楓　え？
瑠璃　ううん。「帰らない」んじゃなくて、「帰れない」かもしれない。そうしたら、汐海の居場所がなくなっちゃうから。
楓　汐海の居場所を私たちが作らなきゃいけない理由なんかないでしょ。
瑠璃　理由はあるよ。
楓　何？
瑠璃　友達だから。
楓　・・・
瑠璃　汐海が私たちのこと、どう思ってるかはわからない。だけど私は汐海のこと、楓や菜々子と同じ友達だって思ってる。だからいつ汐海が戻って来てもいいようにしときたいの。
楓　・・・

菜々子　練習しよ。私たちまだまだ下手だからさ、足引っ張っちゃうと、汐海も困るから。

瑠璃　そうだね。

瑠璃は曲をかける。

瑠璃と菜々子は踊る。

楓は踊らない。

しばらくして夕暮れになる。二人は踊り続けている。

汐海が来る。

汐海に気づく瑠璃と菜々子は踊るのをやめる。

楓も気づいて汐海を見る。

間。

汐海が頭を下げる。謝っているようだ。

音楽は流れ続けている。

楓は汐海に背を向け踊りだす。

踊る楓を見ている三人はやがてそれに加わる。

四人で踊る。

―　幕　―

ラストは音楽を大きな音量で流すことになるので、聞こえるような台詞はありません。ただ初演では以下のようなサブテキストを作りました。上演の際に参考にしてください。

<十一場・ラストで曲を流してからのサブテキスト>

菜々子　練習しよ。私たちまだまだ下手だからさ、足引っ張っちゃうと、汐海も困るから。

瑠璃　そうだね。

瑠璃は曲をかける。（以下の台詞はサブテキスト（心の声）です。会話はアイコンタクトで交わされると思ってください。）

瑠璃と菜々子は楓を見る。

瑠璃　楓・・

菜々子　しょうがないよ。練習は二人でやろ。

瑠璃　うん。そのうち楓もやってくれるよね。

菜々子　うん。友達だもん。

二人は踊る。

楓　私だって、汐海と一緒に踊りたくないわけじゃないよ。だけど、そう簡単じゃないんだよ。私たちが考えるよりもずっと。（二人をちらっと見て、立ち上がる）いいよ。踊って、気が済むんなら。私はああ言っちゃった以上、踊る気はないから。でも、二人と絶交するとか、そういう気もないから、一応付き合うけど・・（奥に座る）

しばらくの間、二人は踊り、楓は座っている。

瑠璃と菜々子は汐海がいることに気付き、ダンスをやめる。

瑠璃・菜々子　汐海・・・

楓　何？　（二人の視線の先を見る）汐海？

汐海が出てくる。

汐海　私、みんなに迷惑かけた。こうやって顔向けできるとは思ってなかったんだけど・・・。私はダンスが好きで、好きなダンスでだったらやり直せるんじゃないかって気がしてる。だからもう一度、一緒に踊りたい。（頭を下げる）

頭を下げた汐海を見ている三人。
頭を上げる汐海。

菜々子　ねぇ。
瑠璃　ん？
菜々子　汐海、来たよ。
瑠璃　うん。
菜々子　また一緒に踊れるよ。
瑠璃　うん。

瑠璃と菜々子は汐海のところに行く。

瑠璃・菜々子　汐海！
汐海　ごめん。
瑠璃　待ってたよ。
菜々子　また一緒に踊ろ。
汐海　ありがとう。・・・楓は？・・・

三人は楓を見る。

楓　汐海が来た。さっき「来ない」って言いきっちゃったよ。でも、汐海と踊りたくないわけじゃないんだ。私だって踊りたいと思ってたよ。だから、これは歓迎することなんだけど、私は「来ない」って言ったから、全面的に大歓迎って態度は取れないよ。どうしよう。・・・仕方ない。とりあえず踊っとこ。

楓は踊り始める。

瑠璃　楓、踊り始めたよ。
汐海　うん。
菜々子　楓も一緒に踊りたいって。

汐海　そうなの？
瑠璃　そうだよ。あれ、意地はってるだけだから。
菜々子　だから、私たちも踊ろ。
汐海　うん！

三人も踊る。
後ろを向いて踊っていた楓もやがて鏡の方を向く。

楓　しょうがないから、付き合ってやるよ。
菜々子　楓も鏡見て踊りだしたよ。
瑠璃　相変わらず素直じゃないよな。
汐海　やっぱりみんなで踊ると楽しいね。

四人は笑顔で踊り続ける。